

『荷風隨筆集(上)』より 日和下駄

野口 富士男 編

小春日和、日和待ち。「日和」という言葉はなんとほっこりとした言葉だろう。題名になっている日和下駄は、「天氣の良い日に履くのに向いた、齒の低い差し齒の下駄のこと。」蝙蝠傘を持って、のんびりと東京の街を歩く作者の姿が目に見えがぶようです。東京がまだ「東京府」だったころ、江戸切図と言われる地図を懐に、辻を曲がり、裏通りを散策した当たり前の日常の風景が描かれています。路地裏を少し歩くと、見晴しの良い高台に出る。東京には何度か行ったことがあるけれど、高台はおろか、高層ビルに登らずに、見晴らしのいいところなんて想像もつきませんでした。頻繁に通ったわけでもなく、住んだこともない東京の話ですが、どこか、懐かしい感じがするのは、失われつつあるものが描かれているからだろうか？本の中に出てくる、麹町の番町辺牛込御徒町辺や、銀座駒形人形町は下駄をカラコ口鳴らしながら歩くから、こんなにテンポのよい地名なんだ。と空想が広がり、下駄の鳴る音が、まるで新発見のチャイムのように思えます。

私は、大阪に住んで、大阪の街を自転車で、北へミナミへ行ったり来たりしています。毎日、目的地は同じだけれど、そこへたどり着くまでに道筋を変えてみる。いつもの曲がり角の一つ先を曲がるだけで、目に映る景色が変わり、気分も変わります。元々、フラフラと角ごとに曲がるのが大好きな私は、新発見を期待しながら、今日も自転車で大阪の街を走っています。

N・Y・



岩波文庫

掲載の記事・写真・イラスト等の全てのコンテンツ無断複写、転載を禁じます。

(株) ファッションビジネス・御堂筋新聞